

四季録

私、Drillmasu

otoは37年ほど彫刻作品を作り続けています。この制作活動

に向かうきっかけを下さったの

は、高校時代に出会った美術の

先生でした。私は高校に入学し、

弓道部に入部しました。当時国

語の古文で平家物語の那須与一

が出てくるくだり「与一、かぶ

らを取つてつがひ、よつびいて

ひやうど放つ」の部分に心酔し

ていたからです。しかし、学校

行事で絵を描く場面で度々時間

を忘れ、部活の練習もせずに絵

を描くような場面が多くなり、

2年生からは美術部に移籍させ

ていただき、何となく油絵を描

いていました。美術のことは何

も分からず、振り返るとただ雰

囲気で絵を描いていたのを思い

出します。「美術＝油絵」とい

う図式が頭の中にあり、小学校

けるような気がしていたのでとにかく絵を描いていればそれでいいのだと考えていました。

その日も50号のキャンバスに

ワシの剥製を描こうとしていま

した。そこに美術の先生が入っ

てこれ、先生は私に「そげな

絵は描くより、君は石彫るほ

うがよか。ついてきんしゃい(博

多弁)」とおっしゃって、私は

私の師匠の話(1)

学校の敷地の隅のほうに連れて行かれました。そこには灰色の

100^キほどあるうかと思われ

る立方体の石が一つ、転がって

いたのです。この美術の先生は、

私がこの高校に入学するのと同

時に、同校の通信制課程から全

日制課程に移ってこられました

た。先生は福岡学芸大学(現福

岡教育大学)の図工科(後の美

術科)で彫塑を専門に学ばれ、

美術教員となられて教壇に立ち

ながら塑像作品を継続的に制作

しておられたのですが、通信制

課程教員の時代に、石屋さんを

している生徒さんから石彫を学

ばれたということでした。注意

して学校の中を観察すると、通



信制課程の校舎の裏にはこの先

生が授業の傍らにこつこつと彫

ってこられた石の彫刻作品がた

たずんでいることに気付きました。

「先生、何を作ったらいいの

ですか?」という私の問いに対

して「顔でも、彫りんしゃい」

というお答えでした。そうか、

顔ならどうということはあるま

い。すぐにできるんじゃないか。

そんなふうに考えていました。

しかし、石を彫るといふのは

そんなに簡単なことではありま

せんでした。太くて大きな「一

寸鑿」とセトウ(大きな石用

の槌)をお示しになられ、先生

は「鑿はこげんして(このよう

にして)、握って、セトウは、

カチン、カチンと当てて彫るっ

たい」とやってみせてください

ましたが、初めは先生のように

リズムカルに打つことはできま

せんでした。

時折、間違つて手をたたいて

しまい、痛い思いをしながらも、

私は毎日放課後に学校の敷地の

隅で石に向かい続けました。

(増本 達彦・松山東雲女子大

教授・彫刻家Drillmasu
asumoto)